栄華その光と影

――源氏物語初音・胡蝶巻と紫式部日記――

原田敦子

はじめに

『源氏物語』玉鬘十帖の初音巻から野分巻までの六帖は、新装なった六条院を舞台に、光源氏三十六歳の春から秋までを四季の推移と年中行事を軸に描き、源氏が主宰する六条院世界の栄華とみやびの生活を月次形式で展開してゆく。このうち春の部を受持つのが初音巻と胡蝶巻であるが、前者では、六条院が迎えた初めての春のめでたさを、元日の歯固めや餅鏡、子の日の遊び、二日の臨時客、十四日の男踏歌などをちりばめて綴り、後者では、晩春の華麗きわまりない景の中で、紫上方の春の町の船楽と秋好中宮の季御読経という二つの盛儀が描き出される。これらの行事のあるものには既に準拠が指摘されていて、それら準拠となるべき行事の年代が、玉鬘十帖の成立年代の推定に有効な示唆を与えるものとされてきた。また、これらの行事の中には、『紫式部日記』に描かれた行事と部分的に相似するものも見られ、『源氏物語』『紫式部日記』双方の行事に関する叙述には、行文上の類似点も指摘される。これらのことから、紫式部は自らの宮仕え中に見聞した行事を『源氏物語』の創作に生かしただけではなく、『紫式部日記』[1]の文章をも物語中に一部取り入れたことが考えられ、そうなると、『日記』は『源氏物語』執筆のための創作ノートの役割をも果たしていたと言えるであろう。しかし、ここではさらに一歩進んで、紫式部が『日記』を執筆することによって獲得した盛儀を見る眼――栄華の光と影を限なく凝視し、表現する方法――とでも言うべきものが、『源氏物語』の創作に確実に生かされていることを、初音・胡蝶両巻の叙述の中にさぐってみたいと思うのである。

一

山中裕氏は、初音巻の正月行事について、六条院を安定した世界として落着かせるためには、当時、式部が仕えていた道長の土御門邸において行われていた宮廷行事をそのまま採り入れることが必要であり、式部は道長とその一族の人々を崇拝の気持で眺めていたからこそ、そうした美しい正月の六条院の場面も書くことができたとされ、二日の臨時客の準拠を『日記』にも描かれた寛弘七年正月二日の臨時客に求められた。[2]無論、こうした準拠説には物語の成立年代の問題がかかわってくるのであるが、氏は、寛弘四年末頃には一応巻末まで書かれていた藤裏葉巻の記事に、寛弘五年十月十六日の

一条帝土御門殿行幸を目のあたりにした式部が大幅に手を加えたのではないかとされる今井源衛氏の説[3]に重ねて、あるいは寛弘七年頃にもう一度手を加えたということになるかもしれぬとも述べておられる[4]。ただし、初音巻の臨時客は六条院で行われた摂関大臣家のそれであるのに対して、『日記』のは中宮臨時客であり、中宮彰子は前年寛弘六年十一月二十五日に三宮敦良親王を出産後、十二月二十六日に内裏に還啓しているので、その舞台も里邸の土御門殿ではなく、前年十月十九日に一条天皇が遷幸された枇杷殿内裏である。もっとも中宮臨時客とて、中宮の里邸たる道長家の権勢を背景に行われるのであるから、初音巻と『日記』の臨時客の記事に描かれたのは、いずれも当代一の権力者の勢威ということになろう。紫式部の初出仕は寛弘三年十二月二十九日と考えられるが[5]、寛弘四年・五年の正月二日[6]と寛弘六年正月二日[7]に中宮大饗と道長家臨時客の双方が行われた際には、式部はいつも中宮に従って内裏にいたはずであるから、式部が実見しえた臨時客の最初のものが寛弘七年正月二日の中宮臨時客だったのである。従って、初音巻に描かれた六条院の臨時客は、式部が実見した中宮臨時客に依拠しつつ、同僚女房などから耳にした道長家臨時客の有様を重ねて描き出した行事と考えてよいであろう。

胡蝶巻では、晩春「三月の二十日あまりのころほひ」に春の町の紫上方の船楽が、ついで翌日には秋好中宮の季御読経が、少女巻における中宮の挑みかけに始まる春秋優劣論争の経過を踏まえて、絢爛豪華なイメージをちりばめて開幕した。このうち中宮季御読経については、近年、甲斐稔氏が、長保二年二月の立后後、春秋の恒例の行事として確立し、春季は原則として三月下旬に催された彰子の中宮季御読経によっているとされ、これらの法会興行の目的は、史実としても、また物語の構想上からも、中宮自身の権威の確立と、中宮の後見者たる道長と光源氏の権勢の示威であったと指摘されている[8]。甲斐氏の論に附載された長保二年から長和元年に至る春秋の中宮季御読経の発願日の表のうち、春季で三月下旬にあたるのは、長保三年（二十八日）・寛弘六年（二十六日）・寛弘七年（二十二日）・寛弘八年（二十七日）の四回のみである。寛弘五年以前は、三月中旬三回、四月二回、五月二回、六月一回であるから、長保三年の三月下旬の例はむしろ稀有な方に属する。従って、式部が胡蝶巻の中宮季御読経を三月下旬のことと設定したのは、長保三年の遠い例によってではなく、寛弘三年十二月二十九日と推定される式部の初出仕以後に経験した寛弘六、七、八年三月下旬の彰子中宮季御読経の例によっていよう。式部が準拠としたのは、これら三年のいずれかの例もしくは三箇年の例の総収ということになろうが、この場合、もっとも蓋然性が高いのは、前年寛弘五年九月十一日に敦成親王を出産して中宮の地位をゆるぎなきものとし、今また第二子を懐妊中[9]の中宮が催された寛弘六年三月二十六日発願の例ということが言えようか。以上の点からすると、初音・胡蝶両巻に描かれた行事に、紫式部出仕後の寛弘年間の宮廷や土御門殿での行事が投影していることは、否定できないようである。

三月の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりことに尽くしてにほふ花の色、鳥の声、他の里には、まだ古りぬにや、とめづらしう見え聞こゆ。山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人々のはつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる舟造らせたまひける、急ぎさうぞかせ

たまひて、おろし始めさせたまふ日は、雅楽寮の人召して、船の楽せらる。親王たち上達部などあまた参りたまへり。[10]

秋好中宮の季御読経に先立つ一日、初音巻で「生ける仏の御国」と荘厳された春の町で、紫上方の船楽が開催された。島津久基氏は、この胡蝶巻の船楽と紅葉賀巻の船楽の「空想の底材」の随一に、寛弘五年十月十六日の一条天皇の道長第行幸の儀を挙げられ、[11]萩谷朴氏も、少女巻の朱雀院行幸の際の船楽や胡蝶巻の船楽と、寛弘五年十月十六日の土御門殿行幸の際の船楽の類似性を指摘して、胡蝶巻の船楽については、竜頭鷁首の船を南池に浮かべ、夜に入ると御前の池に篝火をともして御階のもとに楽人を召し、階上の上達部・親王達と管絃を合奏する趣向が同じであると述べておられる。[12]さらに山中裕氏は、胡蝶巻の船楽と土御門殿行幸の際のそれとの関連について、季節の違いはあるものの、新造の船で船楽が行われ、しかも中宮の里下り中であるという共通点を挙げられて、

唐めいたる船つくらせたまひける。（中略）龍頭鷁首を、唐のよそひに、ことごとしうしつらひて、（胡蝶）

その日あたらしく造られたる船ども、さしよせさせて御覧ず。（日記）

れうとうげきしゅの生けるかたち思ひやられて、（胡蝶）

暮れかかる程に皇鬣といふ楽、いと面白く聞ゆるに、（日記）

暮れゆくまゝに楽どもいとおもしろし。（日記）

の如く、文章上の共通点も多いことを指摘された。[13]ただし、同じく文章上の共通点として山中氏が挙げられた、

この山のさきより漕ぎまひて（胡蝶）

山のさきの道を舞ふほど、（日記）

の部分は、胡蝶巻の方が、紫上方の船楽に招待された中宮方の若い女房達を乗せた舟のことを言うのに対し、『日記』の方は、長慶子を退出音声に奏しながら楽船が「南山の築山の岬を舟が漕ぎ廻る点では一致するものの、であって、南池の築山の岬を舟が漕ぎ廻る点では一致するものの、描かれた事柄が行事に占める意味合いにはかなりの違いがあると言わねばならない。この胡蝶巻の中宮女房が舟に乗って春の町を訪問するという趣向については、はやく益田勝実氏が『日記』寛弘五年九月十六日夜の女房舟遊びの記事との関連に注目されて、女房が舟遊びするということはごく日常の生活事で、同時に屢々はないことから、式部の想像の産物や伝聞ではなく、九月十六日の経験が胡蝶巻の描写を生んだとされ、「尋常のモデル論の材料と稍異つて余りに宮廷生活の尋常な断片であり、それだけにモデル価値が高いのではあるまいか」[14]と述べておられる。

広大な敷地に四季の町を配置した六条院は、光源氏の権勢の象徴であると共に、季節美の極致でもあった。その春の部にあたる初音巻と胡蝶巻は、六条院が初めて迎えた春をことさら丹念に描いて、源氏の栄華の絶頂を表現すると共に、辺境の筑紫から忽然と六条院に姿を現した玉鬘を、全盛期の中に既に老化の萌しが見えかかった六条院世界の次代を担う主役として、無理なく定位しようとする。そのためには、物語のそこここに史実を埋めこんで、物語の写実性、現実感を強化する必要があった。[16]六条院の年中行事については、既に山中裕氏の詳細な考究があるが、[17]一旦書き上げられた玉鬘十帖の物語に、式部が宮仕え中に実見し、強い印象を受けた行事や、『日記』にも描いた行事を取り入れて筆を加えたことは充分に考えられる。光源氏の六条院物語に道長家の生活や行事がいかに投影されているか、読者の関心と期待もそのあたりに集まったと思わ

れるからである。しかし、山中氏が言われる如く、式部の道長とその一族の人々への崇拝の気持がそのまま物語の中に温かく流れ入ったかどうかは、また別問題であろう。栄華の諸相を凝視し、これを描きとる式部の眼は、光に相添う影の部分と、自分の内なる闇に向かっても開かれていたからである。

二

三谷栄一氏によれば、三条西実隆は毎年正月二日に初音巻を読むことを嘉例としたという。[18] 成程、初音巻の冒頭部は初春の六条院世界の無類の瑞気を語ることに筆を起こし、豪華な六条院の中でも一際めでたい春の殿の御前は、「生ける仏の御国とおぼゆ」とまで讃嘆されている。しかし、既に秋山虔氏や増田繁夫氏[19]が読み解かれた如く、初音巻は、読み進むにつれ、この光に満ちた六条院世界にも影の部分——この世に生きる苦患が厳然として存在することを開示する仕組みになっている。[20] 冒頭部に続く女房達の餅鏡を前にしての祝言の場面では、源氏に忘れられた中将の君の恨みが早くも露出するし、夕刻になって六条院の町々の女性達を経めぐる源氏が、それに先立って紫上と交した寿歌に、秋山氏は源氏の紫上に対する慰撫と紫上の源氏に対する制御を読みとられた。[21] 今や源氏の第一の妻と自他共に認める紫上にして、なお慰撫を要する不安の海に漂っていたということなのであろう。

最初に訪れた同じ春の町の明石の姫君の所へは、生母明石の君から贅を尽した贈物が届けられていたが、それにつけられてあった歌

年月をまつにひかれて経る人にけふぐひすの初音きかせよ

には、同じ六条院にありながら何年も逢うことができない母娘のあり方が示されていて、源氏の胸を痛ましめる。次の夏の町の花散里は、ひっそりと上品に住みなして、源氏との仲らいも、年月が経つにつれて気持の隔てもなく、しみじみとしたものになっていたが、その容姿は、「御髪などもいたくさかり過ぎ」て、源氏に「やさしき方にあらねど、葡萄鬘してぞつくろひたまふべき」と思われる程に衰えていた。源氏は、これが他の男だったら連れ添う気持もさめてしまったであろうにと、長年世話をしつづけていることを本望に思い、これも花散里が心変りせず一途に自分を頼ってきたからだと、自分の心長さ・相手の心の重さに満足して立ち去る。一見、源氏の庇護下にある女性の幸せを述べるようでありながら、源氏をめぐる多くの女性の一人として堪え忍んできた花散里の受苦の年月の長さが、衰えた髪の描写に思い合わされるところではある。花散里と正反対に若々しく華やかな玉鬘にしても、「もの思ひに沈みたまへるほどのしわざにや、髪の裾すこし細りて」と述べられていて、その流浪の日々の苦難が暗示されている。

暮れ方に訪れた明石の君の冬の町では、渡殿の戸を開けるなり匂ってくる優雅な香と豪華な室内の鋪設に、明石の君の豊かさと高雅な趣味がまず示されるが、とり散らした反故の中には、

めづらしや花のねぐらに木づたひて谷のふる巣をとへるうぐひす

と、春の町の姫君から返歌を得た嬉しさをしたためた文が置かれてあり、この人の場合も「けざやかなる髪のかかりの、すこしさはらかなるほどに薄らぎにけるも」と、髪の衰えが述べられて、春の町に姫君を訪問した時に重ねて、この母娘のおかれた状況の淋しさが反芻されることになる。源氏は明石の君の魅力にひかれて、新年早

々と気がねしながら泊ってしまったが、「まだ曙のほどに」帰ってゆく源氏を見送る明石の君にも、源氏の朝帰りを迎える紫上にも、紫上の不興を気づかう源氏にも、浮き立つような新春のめでたさとは程遠い苦悩が抱かれたまま、二日の朝が明けた。けだし、四季の町にそれぞれの女人を配し、この世の極楽浄土の現出したかと思われる六条院の構想に本然的に不可避な暗部が、露呈したと言えるであろう。

正月二日の臨時客の盛儀は、源氏の栄耀栄華を余すところなく物語るものであったが、同じ六条院の内にも、こうした権勢から隔てられた陰の側に身をおく人々がいた。

かくののしる馬車の音をも、物隔てて聞きたまふ御方々は、蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくや、と心やましげなり。

先の光源氏の町々の訪問の中で、髪の衰えなどによってそれとなく暗示されていた女人達のつながれた苦の世界が、臨時客というハイライトによって、にわかに黒々とその影を増してくるという構図である。

さらにそこから遠く離れた二条院に住む末摘花と空蟬についても、またしても末摘花の衰えた白髪姿と空蟬の静かに住みなした尼姿とが記されて、源氏の女人訪問は終わる。かつて源氏の若き日々を彩ったこの人達も、もはや源氏の生活に大きくかかわってくることはないであろう。

かやうにても、御蔭に隠れたる人々多かり。（中略）我はと思しあがりぬべき御身のほどなれど、さしもことごとしくもてなしたまはず、所につけ人のほどにつけつつ、あまねくなつかしくおはしませば、ただかばかりの御心にかかりてなむ、多くの人々年を経ける。

源氏の庇護下にその情にすがって大勢の人々が年を過ごしてきたとは、女人達をあまねく照らす源氏の徳を言いつつ、その実、栄華の岸に迎え取られることなく、陰の側に生きることを余儀なくされた女人達の群を一瞬ひそやかに浮かび上らせる。六条院世界とは、こうした人々の思いをも円周に繞らせた世界なのであった。

巻末、雪がちらつく中での男踏歌の行事では、六条院が一行を迎える小駅に当てられていて、新春らしい華やいだ雰囲気がただよう中、女性達が物見に招かれて、玉鬘と明石の姫君の対面が行われ、紫上にも几帳ごしの対面が実現する。男踏歌という行事は、玉鬘を六条院にとけこませ、多くの人々に引き合わせるのに、もっとも適切な場として設定されたのであった。[22]

如上のことからして、初音巻は、主として年中行事の部分に光の世界、源氏の庇護下にある女性達の生活という私的側面に影の世界を描き、二日の臨時客の記事を回転軸に、明暗をシンメトリカルに配置する構造をとっていると言うことができる。即ち、巻頭の元日の歯固めと餅鏡に対する巻末の男踏歌が明の部分、正月行事のハイライトたる臨時客の行事を中にはさんで、前に描かれる六条院の女性達の受苦と、後に描かれる二条院の女性達が住む苦の世界が暗の部分である。描かれる新春行事も、元日の歯固めと餅鏡は毎年恒例の、年中行事というよりは風俗の如きもの、男踏歌は考証されるように既に永観元年（九八三）を最後に消滅した行事であって、いずれも行事としては今めかしさに欠ける。[23] この巻の臨時客の行事が、『日記』寛弘七年正月二日条に記された中宮臨時客の行事に、伝聞する道長家の臨時客の行事の有様を加えて書かれたとするならば、

式部はまさしく重層する光と影の世界の要の部分に自ら体験した盛儀を置いて、叙述の現実感を高め、同時に明と暗の対照をより鮮かにして見せたと考えられる。

前述の如く、源氏をめぐる女性達の受苦の生活は、主として彼女達の髪の衰えによって表現される。それにしても、花散里・玉鬘・明石の君・末摘花と続く描写は、少し執拗に過ぎ、異様とも言えるのではないか。当時、美人の条件の第一は髪であったとされるから、女性の容姿を言うのに髪がとり上げられるのは、当然と言えば当然であったし、そこに女性作家ならではの少し意地悪な眼が働いたにしてもである。初音巻のこのあたりには、「このついでに」で始まる『日記』消息文的部分の女房月旦における女房の容姿批評に働いた作者の眼が投影しているのではなかろうか。この女房月旦では、登場する女房十一人のうち六人について何らかの形で髪に関する言及があり、月旦の最初に、

さしあたりたる人のことは、わづらはし、いかにぞやなど、すこしもかたほなるは、いひはべらじ。[24]

としながらも、小大輔と五節の弁の二人については、

大輔はささやかなる人の、やうだいいといまめかしきさまして、髪うるはしく、もとはいとこちたくて、丈に一尺余あまりたりけるを、おち細りてはべり。

五節の弁といふ人はべり。（中略）髪は、見はじめはべりし春は、丈に一尺ばかり余りて、こちたくおほかりげなりしが、あさましう分けたるやうに落ちて、すそもさすがにほめられず、長さはすこし余りてはべるめり。

と、冷酷とも思える観察が記される。思うに、このような観察は、多くの女性の容姿と生活の変転とを一度に見てしまう女房生活によって、はじめて可能となるものではなかろうか。

三

六条院の新春を描く初音巻は、光と寿福に満ち溢れた世界ではなく、光源氏の栄華と共に、源氏が主宰する六条院世界の繁栄と調和を成りたたしめている陰の部分を黒々と浮き上らせていた。これに比して、胡蝶巻の晩春の景は、あたかも白日夢の如く静謐で明るい。しかし、初音巻とは異なった隠微な形で、華麗な世界に侵入してくる不吉な影を表現している。

『日記』寛弘五年十月十六日条の船楽と胡蝶巻のそれとの大きな差違は、初冬晩春という季節の違いもさることながら、胡蝶巻に顕著な唐様仕立てであろう。

唐めいたる舟造らせたまひける、龍頭鷁首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて、楫とりの棹さす童べ、みな角髪結ひて、唐土だたせて、

『日記』にも「龍頭鷁首の生けるかたち思ひやられて」とはあるが、それ以上の唐めいた装置はない。しばしば指摘されるように、この胡蝶巻の船楽の部分には漢詩文の引用が頻出する。[25] いわく、「廊を繞れる藤の色」[26]「まことに斧の柄も朽いつべう」[27]「亀の上の山もたづねじ舟のうちに老いせぬ名をばここに残さむ」[28]、「行く方も、帰らむ里も忘れぬべう」[29]……。引用によって構築される唐風の世界は、爛柯の故事、蓬莱山などさまざまであるが、その多くが仙境を目指すものではあった。光源氏によって創出されたこの世のものとも思えぬ理想郷は、「まことの知らぬ国に来たらむ心地し

て、あはれにおもしろく」、「他所には盛り過ぎたる桜も、今盛りにほほ笑」むのも、この世と仙境における時間の歩みの違いを示唆するかのようである。龍頭鷁首の船を「唐の装ひにことごとしうしつらひ」、楫とりの童に角髪を結わせて「唐土だたせ」た光源氏の意図も、ここにくれば、六条院を仙境蓬莱山に見立てての趣向であったことが明らかになる。女房の一人が詠んだ「亀の上の山もたづねじ…」の歌は、こうした主人の意図と、その趣向の下敷きとなった『白氏文集』「海漫漫」の詞句を正確に読み取った上での追従である。「亀の上の山蓬莱山をわざわざ訪ねるには及びません。この不老不死の仙境で楽しみをきわめて、舟の中で不老の名を残すことに致しましょう」。この歌は、「海漫漫」の、秦始皇帝の命により方士徐福に率られて蓬莱の島に不老不死の仙薬を求め、舟中に老いた童男卯女の故事を反対意に用いて、華麗な六条院の晩春の景の中の一点曇りなき光源氏の栄華を祝福するようでいながら、その実、白楽天の諷諭詩の真の意をも陰画として浮かび上らせてしまう。専制者の恣意の犠牲となった童男卯女の悲劇が、光源氏の栄華の陰の部分に読者の目を向けさせずにはおかないのである。[31]

「海漫漫」の詞句の引用は、『日記』「十一日の暁」条の中宮御堂詣での記事の中にも見られる。

月おぼろにさし出でて、若やかなる君達、今様歌うたふも、舟にのりおほせたるを、若うをかしく聞こゆるに、大蔵卿のおほなおほなまじりて、さすがに、声うち添へむもつつましきにや、しのびやかにてゐたるうしろでの、をかしう見ゆれば、御簾のうちの人もみそかに笑ふ。「舟の中にや老をばかこつらむ」といひたるを、聞きつけたまへるにや、大夫、「徐福文成誑誕多し」と、うち誦じたまふ声も、さまも、こよなういまめかしく見ゆ。

「十一日の暁」条の年時については諸説あるが、萩谷朴氏が寛弘五年五月二十二日、土御門殿での法華三十講結願の日の暁とされたのに従うべきであろう。懐妊六ヵ月で里下り中の中宮彰子の安産を祈願して修された土御門殿法華三十講は、例年に倍する上達部が参会した格別の盛儀だったと言う。結願の日の暁には中宮が池の中島の御堂に臨御され、後夜の勤行の後、「殿上人舟にのりて、みな漕ぎつづきてあそぶ」舟遊びが華やかに催された。「舟の中にや…」は、寛弘五年当時五十二歳の大蔵卿藤原正光が年がいもなく本気で若君達の中にまじって、しかし、さすがに気がひけるのか遠慮がちにしているさまを、不老不死の薬を求めて蓬莱の島に至らぬうちに舟中で老いた童男卯女の故事になぞらえた式部の秀句であって、「徐福文成誑誕多し」と中宮大夫斉信に後を続けられることによって、その博学多識と機智が賞揚されるところともなった。おそらく式部の知的優越感を満足させる出来事であったろうことは、「うち誦じたまふ声も、さまも、こよなういまめかしく見ゆ」との斉信への讃辞によくあらわれている。萩谷朴氏も指摘されている如く、[32]

をととしの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。

（日記　消息文的部分）

の「をととしの夏」は、中宮懐妊七ヵ月に入った寛弘五年五月にあたっていて、胎教を始むべき妊娠七ヵ月という適期に新楽府進講の事が始められているので、丁度この頃の式部の頭の中には、新楽府中の「海漫漫」の詞章が生々しい知識として記憶されていたのであ[33]

ろう。

大蔵卿藤原正光は関白太政大臣兼通息で、兼通の弟兼家を父とする道長とは従兄弟にあたる。『日記』中では寛弘七年正月二日の臨時客の記事中に列席の上達部の一人として再登場するが、当年五十四歳の正光は、四十四歳の中宮大夫斉信には勿論、道長の長男で十九歳の頼通にも席次を超えられている。頼みとする兄の右大臣顕光も、娘元子を一条帝後宮に入れてみたものの（承香殿女御）、はかばかしい結果は得られず、道長に馬鹿にされ、政権の中で疎んじられる存在であった。この顕光についても式部は、

右の大臣よりて、御几帳のほころび引きたちみだれたまふ。さだすぎたりとつきしろふも知らず、扇をとり、たはぶれごとのはしたなきも多かり。

（日記　寛弘五年十一月一日　若宮御五十日）

右の大臣、「和琴いとおもしろし」など聞きはやしたまふ。ざれたまふめりしはてに、いみじきあやまちのいとほしきこそ、見る人の身さへひえはべりしか。

（同　寛弘七年正月十五日　二の宮御五十日）

と、いずれも晴れの場での酔態と失敗を忘れずに書き記している。「十一日の暁」に、「上達部、おほくはまかでたまひて、すこしぞとまりたまへる」中にあって後に残り、息子程の年齢の若君達の舟遊びの仲間入りをするのは、正光の道長家への追従でなくて何であろう。本来ならば「老も忘るべき」歓楽のはずが、「老をばかこつらむ」とされたあたりに、自己を道長家の側に置いた紫式部の辛辣な皮肉がある。しかし、ここでは式部の関心は主として「舟」と「老」とに集中していて、「海漫漫」の引用も文字通り断章取義に終り、諷諭詩の真意には程遠いと言わざるを得ない。しかも、胡蝶巻における詞句の引用が盛儀の全体を一瞬陽画から陰画へ反転させてしまうのとは異なり、御堂詣での記事における引用の意味は、正光個人への皮相的な揶揄と冷笑、そして式部自身の「才のさかしいで」に終始する。この場合、正光の老醜と権勢への追従を批判することは、決して道長家の栄華に水をさすものではなく、むしろ光を添えることになるのであった。ただここで注意すべきは、胡蝶巻の女房の歌が六条院の盛儀を陰画と化してしまうのは、初音巻から読み進んだ読者の眼が、というよりは作者の仕掛けた装置がそのような読み方を促すのであって、現実のレベルで主家の側に身を寄せて正光を揶揄した式部と、胡蝶巻船楽の場面で主家讃美のために「亀の上の…」の歌を詠んだ女房との間には、「海漫漫」を引用する意識において、そんなに大きな径庭はないということである。いずれにしても、盛儀または盛儀の余韻の残る中での舟遊びに「童男卯女舟中老」を重ねて見る発想は共通のものであり、胡蝶巻のこの部分が御堂詣での記事にヒントを得て書かれたのは、ほぼ間違いないところであろう。

四

胡蝶巻の船楽の夜、六条院では歓楽が尽きることなく、庭前に篝火をともし、階下に楽人を召して、階上の上達部・親王達と合奏が行われた。

物の師ども、ことにすぐれたるかぎり、双調吹きて、上に待ちとる御琴どもの調べ、いと華やかに掻きたてて、安名尊遊びたまふほど、生けるかひありと、何のあやめも知らぬ賤の男も、

御門のわたり隙なき馬 車の立処にまじりて、笑みさかえ聞きけり。

ある事柄のめでたさ、素晴しさを言うのに、物の情趣も知らぬ賤の男や下人までもが感動するというのは、『源氏物語』の常套表現ではあった。

……、さるいみじき姿に、菊の色々うつろひ、えならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる、入り綾のほど、そぞろ寒く、この世の事ともおぼえず。もの見知ましき下人などの、木のもと岩がくれ、山の木の葉に埋もれたるさへ、すこしものの心知るは涙落しけり。　（紅葉賀）

……、髪着こめたるあやしの者どもの、手をつくりて額にあてつつ見たてまつり上げたるもをこがましげなる。賤の男まで、おのが顔のならむさまをば知らで笑みさかえたり。　（葵）

紅葉賀巻の例は、青海波を舞う光源氏の舞姿の美しさを、葵巻の例は、新斎院の御禊の行列に供奉する源氏の姿の立派さを言う。しかし、胡蝶巻の例が他と異なるのは、奏楽の見事さが賤の男に「生けるかひあり」との感動を呼び起こしたとされる点である。実は、これと好一対の例が初音巻にあった。第二節に引いた、六条院の臨時客の盛儀を春の町の外で聞く女性達の物思いの場面である。

かくののしる馬 車の音をも、物隔てて聞きたまふ御方々は、蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくや、と心やましげなり。

同じ六条院内に住み源氏の庇護を受けながら、華麗な春の町に住まぬ花散里や明石の君には、「物の心知る」故の悩みがあった。その六条院の埒外「御門のわたり隙なき馬 車の立処」にあって、六条院の栄華から本来的に遠くさし放たれているはずの賤の男が、「何のあやめも知らぬ」故の生甲斐とは、何という皮肉であろう。あくまでも明るく華麗な胡蝶巻は、初音巻と異なり、栄華から疎外された人々の痛苦をあらわな形で語りはしない。しかし、「生けるかひあり」の一句は、六条院の繁栄が賤の男達の生活に何らの恩沢を与えるものではないことを逆照射する。邸内から洩れてくる楽の音に満面に笑みを浮かべて聴き入る賤の男の存在は、六条院の周囲に黒々と沈む闇の世界を、一瞬の間想起させるのである。

五日の夜は、殿の御産養。（中略）あやしきしづのをのさへづりありくけしきどもまで、色ふしに立ちがほなり。（中略）ここかしこの岩のかくれ、木のもとごとに、うち群れつつをる上達部の随身などやうの者どもさへ、おのがじし語らふべかめることは、かかる世の中の光のいでおはしましたることを、かげにいつしかと思ひしも、およびがほにこそ、そぞろにうち笑み、ここちよげなるや。まして、殿のうちの人は、何ばかりの数にしもあらぬ五位どもなども、そこはかとなく腰もうちかがめて行きちがひ、いそがしげなるさまして、時にあひがほなり。

（日記　寛弘五年九月十五日）

御輿むかへたてまつる。（中略）寄するを見れば、鶏輿丁の、さる身のほどながら、階よりのぼりて、いとくるしげにうつぶしふせる、なにのことごとなる、高きまじらひも、身のほどかぎりあるに、いとやすげなしかしと見る。

（同　寛弘五年十月十六日）

敦成親王五日の産養が道長の主宰で行われた夜、皇子誕生の慶事とは本来無関係なはずの随身や、何程の数にも入らない道長邸の五

位の者どもまでが、まるで我が手柄のように得意顔に振舞い、めでたさを我がものと錯覚して酔うさまに、式部は権勢に追従する俗物の召使根性を見出だして、痛烈な批判を浴びせかけている。「何ばかりの数にしもあらぬ五位ども」とは、とりもなおさず式部の出身階層であった。式部はこれら下吏の内に、中宮女房として主家の栄華を全的に讃美し権勢に同化しようとする自己と同質のものを見てとることにより、かくも苛酷になりえたのである。同時に式部には、如何に讃仰し如何に追従しようとも、これら下吏達と同様、自分も主家の栄華からはじき出された存在であるとする冷厳な自覚があったとしなければならない。

土御門殿行幸の日の駕輿丁の姿には、本然的に権勢からさし放たれ、陰の部分にあって栄華を支えることのみを運命づけられて生きてきた人間の受苦の形が凝結している。式部をして「なにのことごとなる」と言わしめたのは、苦しみが自分と同じだというだけではなく、その受苦の姿そのものが華やかな盛儀の場ではどうとりつくろいようもなく不調和であることへのいたたまれなさではなかったろうか。

六条院の門前で中から洩れてくる楽の音に喜悦する賤の男の姿に、物語作者は殊更な侮蔑も苦しみへの共感も記しはしない。むしろ、六条院の栄華を言寿ぐ「ほかひびと」の如き役割を演じさせながら、彼等が「生けるかひあり」としたものが決して「生けるかひ」とはなりえない皮肉を暗示するのみである。ここでも船楽の場面の歌と同様、本来寿言であったものが逆に影の世界を浮び上らせる反転装置と化していることを確認しておきたい。けだし、このことを可能ならしめたのは、『日記』を書くことによってつちかわれた、栄華の実相にくい入り、栄華から疎外された存在に我身と同じ痛苦を見出していく作者の眼であったろう。

五

胡蝶巻前半部の紫上方の船楽と秋好中宮の季御読経は、表面あくまでも華麗に進行して、六条院とその主宰者光源氏の繁栄と勢威を証したてゆく。私邸での船楽を「雅楽寮の人召して」催し、本来宮中で行われるはずの中宮季御読経が中宮の里邸たる六条院で修されるのも、臣下の身分を超越した光源氏の「王者の徳」[34]をあらわしている。少女巻に端を発する春秋優劣論争の経過を受けて、紫上方の船楽には中宮方の若い女房達が招待され、秋好中宮の季御読経には紫上から桜と山吹の供花が贈られると共に、「胡蝶」の歌が贈られて、春秋論争は紫上方の圧倒的な勝利に帰した。しかし、その船楽も、外の世界では桜も盛りを過ぎ、六条院内の他の町からしても、この紫上の町の春は「まだ古りぬにや」と思われるほどの、かろうじて最期の姿を持している時の出来事なのであり、紫上が献じた瓶の桜は、折からの風に「すこしうち散り紛ふ」たと言う。この時春の町が保っていた危うい均衡は、やがて六条院に訪れるであろう世代交代の波のかすかな予兆とも読みとれる。これも作者が意図的に仕掛けた反転装置と言うことができようか。

初音巻と胡蝶巻は、前者は明暗重層する構造により、後者は華麗な晩春の景の中にしくまれた隠微な反転装置によって、光源氏の栄華とそれに相添う影の世界を表現している。ここで注意すべきは、そのいずれの場合にも、『日記』に描かれた行事や、『日記』中の盛儀の場面をさし貫く作者の眼が物語の中にとり込まれて、重要な

役割を果していることであろう。

紫式部が目にし『日記』に描いたのは、全盛期の道長家というよりは、中宮彰子の第二皇子敦成親王、第三皇子敦良親王の出産によって、外戚としての道長の地位が確立し、長い将来にわたってその繁栄が保証された、いわば興隆期の道長家であった。そして『紫式部日記』は、皇子の出産により天下の政権の帰趨が決した後、道長に要請されて書いた主家栄華の顕彰録だったのである。[36] 式部は『日記』の中で、道長家の栄華の諸相と善美を尽した行事のめでたさを、そして主家の人々の「物の心知る」さまを全的に讃美した。しかし、主家の栄華に全身的に同化しようとする我からふと現実に立帰るとき、眼前の栄華から疎外された自己と、その自己の内にしかと抱かれてあるこの世に生きる憂悶を見据えざるを得なかった。そうした彼女の眼に、栄華なるものの実相が俄かにくっきりと、光と影の対照も鮮やかに射とめられることになる。紫式部は、中宮女房として主家栄華の記録をなさねばならなかったことにより、自己に課せられたさまざまな制約を切りかえすべく、自己の全生活をかけて自己にとっての事実の意味を問い続け、単なる記録とは異なる、より高次の、より主体的な事実認識を獲得したのであった。[37]『日記』執筆とほぼ同時期の道長家や宮廷の行事、さらには『日記』にも記された盛儀を取り込んで書いた初音巻や胡蝶巻の叙述に、こうした式部の栄華を見る眼が入り込んでしまうのは、不可避のことであったと言えよう。栄華を描かねばならなかったが故に影の世界を見てしまった式部の眼がそして筆が、華麗なる六条院の世界の内と外に、黒々とした闇を沈めてしまったのである。

注

(1) 以下、『日記』と略称する。
(2) 「源氏物語の準拠と史実―玉鬘十帖を中心として―」阿部秋生編『源氏物語の研究』所収。
(3) 人物叢書『紫式部』一九七～一九八頁。
(4) 注(2)に同じ。
(5) 萩谷朴「紫式部の初宮仕は寛弘三年十二月廿九日なるべし」『中古文学』第二号 昭和43・3。および『紫式部日記全注釈』下巻 一二二～一二四頁。
(6) 『御堂関白記』同日条。
(7) 『権記』同日条。
(8) 「胡蝶巻の季の御読経」『中古文学』第三十八号 昭和61・11。
(9) ただし、彰子にとっての第二子敦良親王の出産は、寛弘六年十一月二十五日のことであるから、三月当時この懐妊が明らかにされていたかどうかは不明である。
(10) 引用は日本古典文学全集による。
(11) 『対訳源氏物語講話』巻五 一七二～一七三頁。
(12) 『紫式部日記全注釈』上巻 四二二～四二三頁。
(13) 注(2)に同じ。
(14) 注(12)の書 四一六頁。
(15) 「女房の舟遊び」『紫式部日記の新展望』所収。
(16) 日本古典文学全集『源氏物語』一 解説 三、史実と虚構。
(17) 「六条院と年中行事」『講座源氏物語の世界』第五集所収。
(18) 「物語る日と文芸の発生」『日本文学の民俗学的研究』所収。

(19) 「源氏物語「初音」巻を読む—六条院の一断面図—」山中裕編『平安時代の歴史と文学　文学編』所収。
(20) 「春秋の争い—玉鬘・初音・胡蝶」『国文学』第32巻13号　昭和62・11。
(21) 注(19)に同じ。
(22) 注(2)に同じ。
(23) 山中裕『歴史物語成立序説』五〇頁。
(24) 引用は日本古典文学全集による。
(25) 『河海抄』『花鳥余情』『孟津抄』『岷江入楚』『湖月抄』他。
(26) 「繞廊紫藤架夾砌紅葉欄」(白氏文集・諷諭　秦中吟「傷宅」)。
(27) 王質の爛柯の故事。
(28) 蓬萊山を「亀の上の山」と言うのは、『列子』湯問篇による。
(29) 「不見蓬萊不敢帰童男卯女舟中老」(白氏文集・諷諭　新楽府「海漫漫」)。
(30) 『河海抄』は、『続斉諧記』に見える、天台山に入って道に迷い、仙女に出会った劉・阮二人の話を挙げ、『湖月抄』は、陶淵明の『桃花源記』を引く。
(31) 日本古典文学全集『源氏物語』三　一五九頁頭注。
(32) 「十一日の暁—前紫式部日記の存在—」『中古文学』第10号　昭和47・11。および『紫式部日記全注釈』下巻　三六七～三七二頁。
(33) 『紫式部日記全注釈』下巻　三一七頁および三八五～三八六頁。
(34) 深沢三千男「王者のみやび—二条東院から六条院へ(続光源氏の運命)—」『源氏物語の形成』所収。
(35) 注(20)に同じ。
(36) 拙稿「紫式部日記の始発—道長家栄華の記録—」『国文学攷』第56号　昭和46・6。
(37) 注(36)に同じ。

——大阪成蹊女子短期大学教授——